

## 大妻女子大学におけるインプット理論に基づく

### 全学英語 eラーニングを活用した教育

Using English E-learning System Based on Input Theory to Develop Students' English Competence  
at Otsuma Women's University

服部 孝彦<sup>1</sup>, ティモシー ライト<sup>2</sup>, グレゴリー ジョンソン<sup>3</sup>, 高野 成彦<sup>4</sup>, ローレンス カーン<sup>5</sup>  
Takahiko Hattori<sup>1</sup>, Timothy Wright<sup>2</sup>, Gregory Johnson<sup>3</sup>, Narihiko Takano<sup>4</sup>, Lawrence Karn<sup>5</sup>

<sup>1</sup>英語教育研究所, <sup>2</sup>社会情報学部, <sup>3</sup>比較文化学部, <sup>4</sup>教職総合支援センター, <sup>5</sup>英語教育研究所

キーワード : eラーニング, インプット理論, インテイク, アウトプット

Key words : E-learning, Input Theory, Intake, Output

#### 1. 研究目的

本研究の目的は、大妻女子大学英語教育研究所が2018年7月から導入している全学の学生が自由に利用できる英語 e-learning システムを活用し、第二言語習得におけるインプット理論に基づき、全学的に学生の英語力を向上させるための方法を考察することである。大学の授業における英語指導だけでは学生の英語力を伸ばすことは困難である。第二言語習得に必要な英語インプットの質を保ちながら量を増やすためには、授業外の e-learning を利用する方法が考えられる。本研究では第二言語習得でのインプットについて、さらに第二言語の習得過程モデルにおけるインプットとインテイクの果たす役割について理論的に考察した。

#### 2. 研究実施内容

1960年代後半以降、第二言語習得研究が盛んに行われるようになり、様々な理論が提示された。そのなかで最も影響力があったのはインプット、インタラクション、アウトプットに関する理論である。この3つの理論はそれぞれ独立した概念であるが、第二言語習得研究発展の一連の流れの中で連続的に提唱され、Block (2003) は Big Theory とよんだ。

インプット仮説 (input hypothesis) は Krashen (1981, 1982, 1985) により提唱され、インプット仮説を発展する形で Long (1983, 1996) によりインタラクション仮説 (interaction hypothesis) が、インプットだけでは不十分だという主張により Swain

(1985, 1995, 2005) のアウトプット仮説 (output hypothesis) が提唱された。インタラクション仮説ではインタラクションにおける修正や意味交渉の重要性が、アウトプット仮説ではアウトプットの重要性が指摘されている。これらの3つの理論は、主張が異なるものの、いずれもインプットが第二言語習得に大きな役割を果たすのは明らかであるという立場である。

Krashen (1982) は行動主義 (behaviorism) に基づく言語教授法に対して疑問がもたれるようになった1970年代にモニター・モデル (monitor model) を唱えた。モニター・モデルは5つの仮説により構成されている。その5つとは、「習得・学習仮説」 (acquisition/learning hypothesis), 「モニター仮説」 (monitor hypothesis), 「自然な順序の仮説」 (natural order hypothesis), 「インプット仮説」 (input hypothesis), 「情意フィルター仮説」 (affective filter hypothesis) である。Krashen (1985: vii) は “the Input Hypothesis forms part of what I call, perhaps audaciously, a theory of second-language acquisition, and it has become clear to me over the last few years that the Input Hypothesis is the most important part of the theory” と述べ、5つの仮説のなかでインプット仮説が最も重要であるとしている。

Krashen (1985: vii) はさらに “The Input Hypothesis claims that humans acquire language in only one way – by understanding messages, or by receiving ‘comprehensible input.’” と述べ、言語習得における大量の「理解可能なインプット」 (comprehensive input) の重要性を強調している。

Krashen によると「理解可能なインプット」とは次のとおりである。学習者の現在の言語レベルを“i”とすると、それに多少知らない単語や文法などが含まれる、すなわち学習者の現在の言語レベルをほんの少し上回るレベルのインプット“i+1”が「理解可能なインプット」である。“i+2”、“i+3”、“i+4”のようにインプット・レベルが難しすぎても、“i-1”、“i-2”、“i-3”のようにインプット・レベルがやさしすぎても言語の習得は上手いかわからないとしている。

Krashen は、「理解可能なインプット」を理解することによってのみ言語を習得すると述べ、話す力は学習者がインプットを理解することを通して言語能力を獲得すれば、おのずから身につくものであると主張した。インプット仮説は「理解可能なインプット」の定義が曖昧なことなどにより理論上の不備が指摘され、心理学的なプロセスの説明が不十分なため、実証も不可能であるという批判を受けた (Faerch & Kasper, 1986; Gregg, 1984; McLaughlin, 1978, 1987)。そして Krashen 理論を発展させた仮説が登場した。

Krashen のインプット仮説を発展させる形で登場したのが Long (1983, 1996) によるインタラクション仮説である。この仮説は、リスニングやリーディングによる一方向のインプットより、会話の中で意味交渉することの方が理解に結びつくという主張である。Long のインタラクション仮説は、インプット仮説の延長上の理論であり、あくまでインプットに焦点があてられた。これに対して Swain (1985, 1995, 2005) は、インプットだけでは不十分で、アウトプットが不可欠であると主張し、アウトプット仮説を提唱した。Swain の理論は、アウトプットをすることで文法処理に注意を向けるなど、第二言語習得に必要な様々なプロセスがうながされると述べている。

以上のように Krashen の理論は発展したが、第二言語習得において、どのような理論的立場に立とうとも、まずインプットがない限り言語習得はあり得ないという考え方は共通であり、提示されたインプットをどうすれば習得できるかが最重要課題である。

### 3. まとめと今後の課題

本研究では、第二言語習得におけるインプット理論について、そして第二言語の習得過程モデルについて、認知的アプローチを中心に論じてきた。

しかし第二言語習得には、認知的アプローチと社会的アプローチがある。認知的アプローチとは、第二言語学習者の個人個人が持っている第二言語能力を他と切り離して考察しようとするアプローチである。これに対して社会的アプローチとは、第二言語能力を取り出して分析することはせず、その能力を持つ人も、その能力が使われるコンテキストも切り離せないと考える。すなわち人も社会も含めた全体を見ていくのが社会的アプローチである。認知的アプローチと社会的アプローチとは第二言語習得を違う視点でとらえている。第二言語習得研究は、どのような視点から、どのような理論の枠組みを用いて研究するかで、収集するデータも異なってくる。

今後は、言語学習を人間関係や社会的コンテキストの視点から捉えた Norton Peirce (1995) のアイデンティティ理論 (identity theory)、個人と環境は一体であり、他者との社会的交流を通じて様々な能力が発達すると捉えた Vygotsky (1962; 1978; 1987) の社会文化理論 (sociocultural theory) についても検討し、認知的アプローチとは別の視点から第二言語習得を考察する必要がある。そのうえで教育実践においては、学生に身につけさせたい英語力とは何か、そのような力を培う英語 e-learning を活用したインプット理論に基づく指導の在り方についての実践的研究を行いたい。

## 4. この助成による発表論文等

### ①雑誌論文

[1] 服部 孝彦, 「インプット理論と第二言語習得のメカニズムに関する考察」, 『JAIAS Journal』, 第20号, 日本総合文化研究会, 2020, pp.1-12. 【査読あり】

### ②学会発表

[1] 服部 孝彦, 「第二言語習得におけるインプットの果たす役割: 認知的アプローチを中心に」, 日本学校教育学会第35回研究大会, 2020年8月11日, オンライン開催

[2] Takahiko Hattori, “Input and Intake Processing in Second Language Acquisition”, 日本言語文化学会第27回研究大会, 2020年9月12日, 大妻女子大学

### ③図書

[1] 服部 孝彦, 「第二言語習得におけるインプットの役割」, 『英語教育の諸相』, 共同文化社, 2021, pp.119-126.

## 参考文献

- Block, D. (2003). *The social turn in the second language acquisition*. Washington, D.C.: Georgetown University Press.
- Faerch, C., & Kasper, G. (1986). The role of comprehension in second-language learning. *Applied Linguistics*, 7, 257-274.
- Gregg, K. (1984). Krashen's monitor and Occam's razor. *Applied Linguistics*, 5, 79-100.
- Krashen, S. D. (1981). *Second language acquisition and second language learning*. Oxford, UK: Pergamon.
- Krashen, S. D. (1982). *Principles and practice in second language acquisition*. Oxford, UK: Pergamon.
- Krashen, S. D. (1985). *The input hypothesis: Issues and implications*. London, UK: Longman.
- Long, M. H. (1983). Native speaker/non-native speaker conversation and the negotiation of comprehensible input. *Applied Linguistics*, 4, 126-141.
- Long, M. H. (1996). The role of the linguistic environment in second language acquisition. In W. Ritchie & T. K. Bhatia (Eds.), *Handbook of second language acquisition* (pp. 43-468). San Diego, CA: Academic Press.
- McLaughlin, B. (1978). The monitor model: Some methodological considerations. *Language Learning*, 28, 309-332.
- McLaughlin, B. (1987). *Theories of second language learning*. London, UK: Edward Arnold.
- Norton Peirce, B. (1995). Social identity, investment, and language learning. *TESOL Quarterly*, 29(1), 9-31.
- Swain, M. (1985). Communicative competence: Some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development. In S. M. Gass & C. G. Madden (Eds.), *Input in second language acquisition* (pp. 235-253). Rowley, MA: Newbury House.
- Swain, M. (1995). Three functions of output in second language learning. In G. Cook & B. Seidhofer (Eds.), *Principles and practice in applied linguistics: Studies in honour of H. G. Widdowson* (pp. 125-144). Oxford, UK: Oxford University Press.
- Swain, M. (2005). The output hypothesis: Theory and research. In E. Hinkel (Ed.), *Handbook of research in second language teaching and learning* (pp. 471-483). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Vygotsky, L. S. (1962). *Thought and language*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Vygotsky, L. S. (1978). *Mind in society: The development of higher psychological processes*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Vygotsky, L.S. (1987). Thinking and speech. In R.W. Rieber & A. S. Carton (Eds.), *The collected works of L. S. Vygotsky, Volume 1: Problems of general psychology* (pp. 39-285). New York: Plenum Press. (Original work published 1934.)